水を縫う（2）

（ある日の昼休み、「僕（松岡清澄）」は、ゲームの話をしていた宮多たちから離れ、自分の席に戻ってしまいました。その日、下校していた「僕」のスマートフォンに宮多からのメッセージが届きました。）

「昼、なんか怒ってた？　もしや俺あかんこと言うた？」

違う。声に出して言いそうになる。宮多はなにも悪いことをしていない。ただ僕があの時、①気づいてしまっただけだ。自分が楽しいふりをしていることに。

いつも、ひとりだった。

教科書を忘れた時に気軽に借りる相手がいないのは、心もとない。ひとりでぽつんと弁当を食べるのは、わびしい。でもさびしさをごまかすために、自分の好きなことを好きではないふりをするのは、好きではないことを好きなふりをするのは、もっともっとさびしい。

好きなものを追い求めることは、楽しいと同時にとても苦しい。②その苦しさに耐える覚悟が、僕にはあるのか。

文字を入力する指がひどく震える。

「ちゃうねん。ほんまに本読みたかっただけ。刺繍の本」

ポケットからハンカチを取り出した。祖母に褒められた猫の刺繍を撮影して送った。すぐに既読の通知がつく。

「こうやって刺繍するのが趣味で、ゲームとかほんまはぜんぜん興味なくて、自分の席に戻りたかった。ごめん」

ポケットにスマートフォンをつっこんだ。数歩歩いたところで、またスマートフォンが鳴った。

「え、めっちゃうまいやん。松岡くんすごいな」

③そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ。

わかってもらえるわけがない。どうして勝手にそう思いこんでいたのだろう。

今まで出会ってきた人間が、みんなそうだったから。だとしても、宮多は彼らではないのに。

いつのまにか、また靴紐がほどけていた。しゃがんだ瞬間、川で魚がぱしゃんと跳ねた。波紋が幾重にも広がる。太陽の光を受けた川の水面が風で波打つ。まぶしさに目の奥が痛くなって、じんわりと涙が滲む。

きらめくもの。揺らめくもの。目に見えていても、かたちのないものには触れられない。すくいとって保管することはできない。太陽が翳ればたちまち消え失せる。だからこそ美しいのだとわかっていても、願う。布の上で、あれを再現できたらいい。（中略）

どんな布を、どんなかたちに裁断して、どんな装飾をほどこせばいいのか。それを考えはじめたら、いてもたってもいられなくなる。

それから、明日。明日、学校に行ったら、④宮多に例のにゃんこなんとかというゲームのことを、教えてもらおう。好きじゃないものを好きなふりをする必要はない。でも僕はまだ宮多たちのことをよく知らない。知ろうともしていなかった。

靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる。

（寺地はるな『水を縫う』集英社　による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「気づいてしまった」とあるが、何に気づいたのか。本文中から十五字で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

□□□～□□□

(2) ――線②「その苦しさ」とは、ここではどのような苦しさを指しているか。適当なものを選びなさい。

ア 自分が本当に好きなことを、好きではないふりをするという苦しさ。
イ 好きなものを追い求めることで、ひとりになってしまうという苦しさ。
ウ 興味がないのに興味があるようにふるまい、さびしさを感じるという苦しさ。

〔　　〕

(3) ――線③「そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ」とあるが、このときの「僕」の様子を表した一文となるように、（　）に当てはまる内容を選びなさい。

送られてきたメッセージが（　）、好きなものをわかってもらえるわけがないと思い込んでいた自分に気づかされている。

ア 意外にも素直(すなお)な称賛(しょうさん)の言葉であったことに驚(おどろ)き
イ 誤解が解けたことがわかるものだったので安心し
ウ 今まで出会った人間とは異なるもので疑わしく思い

〔　　〕

(4) ――線④「宮多に例の……教えてもらおう」とあるが、「僕」はなぜこのように思ったのか。最も適当なものを選びなさい。

ア 自分の好きなことを理解してくれた宮多に感謝し、自分も宮多たちの好きなものを好きなふりをするべきだと思ったから。
イ 自分が宮多たちのことを知ろうともしていなかったことに気づかされ、宮多たちのことを少しでも知ろうと思ったから。
ウ 自分は刺繡をすることだけが趣味だと考えていたが、宮多たちに合わせてゲームにも興味を持つべきだと思ったから。

〔　　〕